て八木淳子氏が、児童相談所での実践を島ゆみ氏が、児童青年精神科の入院での治療を岩垂喜貴氏と牛島洋景氏が、小児精神保健の外来治療を小平雅基氏と齋藤真樹子氏が、小児病院における実践を三宅和佳子氏が紹介している。それぞれの臨床の場での特徴が提示されており、TF-CBTが多くの場で丁寧に適用され、それによって救われた子どもの事例も多く示されている。その多くで共通に述べられていることの一つが、それぞれの施設でともに働く人の理解を得ることの重要性である。TF-CBTはトラウマを扱うこともあり、治療者にとっても時間と心理的エネルギーが必要とされる。そのため、その子どもに直接かかわるスタッフはもちろん、その施設として取り組む姿勢が求められていることが示されている。また、八木が述べているように、トラウマに影響する子ども自身の状態や子どもの環境を把握することの大切さも記載されている。つまり、トラウマ反応があるからTF-CBTを行えばよいというだけではなく、丁寧なアセスメントに基づいて、時期も考えながら治療に入る必要性も示されている。TF-CBTの教科書を読むだけではわからないそのようなプロセスも丁寧に記載されているのであり、これからTF-CBTを中心としたトラウマ治療に取り組もうとしている治療者にとっては多くの示唆が得られるであろう。

トラウマを抱えている子ども、その反応に苦しんでいる子どもは決して少なくない。しかし、子どもはそれが反応であることすら理解していないことがほとんどである。そのような子どものトラウマを意識し、ケアし、その中で必要な子どもにしっかりとした治療が行われるような体制が求められている。本書はそれを担おうとする人々にとって大きな支えとなるものであり、治療実践を行う人々には読むたびに発見があるはずである。ぜひ繰り返し読んでほしい実践の書である。

奥山眞紀子
（おくやま・まきこ／子どもの虐待防止センター）

森川すいめい著
『オープンダイアローグ　私たちはこうしている』

本誌前号（小林、二〇二一）で同著者による『感じるオープンダイアローグ』を取り上げたが、その際、評者は以下のような注文をしていた。

ＯＤ（オープンダイアローグ）では「『感情のやりとり』が大きな比重を占めているためでもあるが、そこで参加者がどのような内的体験をし、クライアントにどのような内的変化が生じるのか、その治療機序がもう一つ不明瞭である。ポリフォニーが大きな力となっているとされるが、評者にはどうにも解せないのである。治療関係の中で当事者としての治療者やクライアントのこころ（情動）がどのように動き、予期せぬ（？）変化が生じるのか、治療者自身の意識体験に即して丁寧に論じてほしいものである。これこそ臨床のエヴィデンスだと考えているからである。それを明らかにできなければ、掛け声ばかりが先行し、結局は一時的な流行で終わりかねないと危惧される」。

その点からすれば、本書はそれに真正面から答えている良書である。前著を仕上げる際に、すでに本書を同時並行してまとめていたのであろう。前著の書評でも書いたことだが、著者は本書でも自らの体験を正直に自分の言葉で平易に語っていて、とても読みやすい。しかし、内容は深く、かつ実践するとなると、とても難しいことである。

ＯＤの実践上の理念の柱となっているのは、「専門家が聞きたいこと」と「患者が何に困り、何を相談したいか」とは違うゆえ、話したいことを話したいと思う人と話してゆくために「話したい場所で聞く」ことである。なぜなら、病院で話すことと家で話すこととは違うからである。そして、話を聞く際の基本的姿

勢は、常に語り手の主体としての気持ちに焦点を当てることである。けっして語る内容にとらわれることなく、あくまで語り手の気持ちを大切にするということである。子どものことで相談に来た家族には、子どものことではなく、子どもによって家族自体がどのような気持ちになっているかを聞くという。あくまで当事者の主体に寄り沿い、主体の気持ちに照準を合わせる面接姿勢である。さらに著者が力点を置いているのが、「理解しようとする」態度を持ち続けることであって、わからないからといってすぐに何かの理論や技法に飛びつくことなく、不確かさに留まること、理性ですぐにわかった気になって納得しないことである。

本書を通読して評者が真っ先に考えたのは、ODがこれほどまでに効果的である（と評者も評価しているが）最大の理由は、面接者の視点が常に当事者の気持ち、つまりは情動の動きに注がれているからではないかということである。情動的（感性的）コミュニケーションに焦点を当てた面接過程のことである。この世界は、当事者自身も気づかない次元の情動の動きを主体としたコミュニケーションゆえ、何かを感じることはあっても、それがどのような意味をもつものかをすぐには理解できない、暗黙の精神過程を表している。ODが「不確かさに留まること」を力説するのはそのためである。アクチュアリティとしての現実を大切にする姿勢である。それゆえ面接者に絶対的に求められるのは、正直さ、誠実さである。なぜなら、このようなコミュニケーション世界で中心的に機能している情動は、人間の精神機能の根源的なもので、もっとも嘘偽りのない体験である。それに向き合いながら面接を進めていくためには、自らの内面に立ち上がる情動の動きに内省的態度で正直になることが決定的に重要である。つまり、ODによる治療機序の核心は情動に焦点を当てながら面接を積み上げているところにある。このように考えていくと、ODのもう一つの柱である一対一で話さないという点について、これは果たしてODの治療機序として本質的なことか、評者は疑問に思う。一対一でも十分に実践できる内容である。ただ、一人で行うとなると精神的にかなりハードな臨床実践になることは確かであるが、ODの本質を見失わないためには重要な点だと思うので述べておきたい。

このように考えていくと、ODでの面接者の姿勢は、非言語的コミュニケーション中心の世界で母子関係に関わる際の基本姿勢と相重なるものがあることに気づかされる。本号に掲載されている評者のエッセイ（小林、二〇二二）でも述べたことであるが、ここでも左脳ではなく右脳の重要性が垣間見える。患者に学ぶ、乳児に学ぶ、そんな時代の到来である。

医学書院　2021年
2000円（税別）

〔文　献〕
小林隆児「ブックガイド　森川すいめい著『感じるオープンダイアローグ』『そだちの科学』三七号、八二―八三頁、二〇二一年
小林隆児「二〇年後の子ども臨床を占う―なぜ臨床家は感性を磨かなければならないか」『そだちの科学』三八号、八〇―八三頁、二〇二二年

小林隆児
（こばやし・りゅうじ／感性教育臨床研究所）

●田中康雄著

『僕の児童精神科外来の覚書』

田中康雄氏はわが国のトップの臨床児童精神科医である。本書は、八年間にわたって『そだちの科学』に連載された「児童精神科治療の覚書」を一冊にまとめたものである。書評子は連載中から愛読していたが、こうして一冊にまとめられたものを読み直し、あらためて感動と同時にさまざまな感慨を持った。

冒頭の第一章に田中氏は記す。「僕の診療は、その多くは生活相談のようなものである」と。第一章か